

# 中国博物館紀行

坂本 亨 (地質標本館)

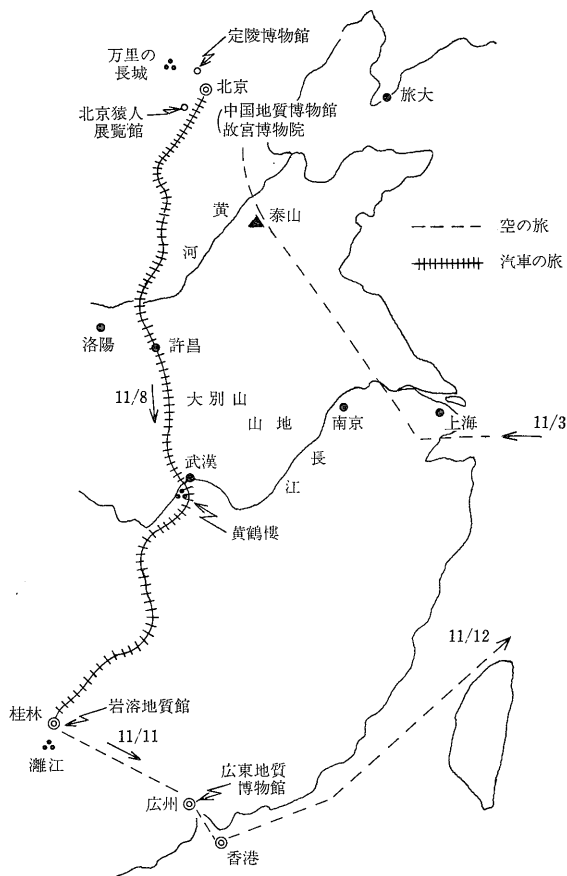
Toru SAKAMOTO

1987年11月3日から12日までの10日間 中国地質博物館の招待で中国へ行ってまきました。直接の目的は北京の中国地質博物館で私達の地質標本館の展示や活動地質調査所の標本管理システムについて紹介すること桂林で開催される全国の地質博物館関係者の展示技術に関するセミナーで同じく地質標本館の展示について紹介すること および各地の地質関係の博物館を見て陳列・展示等についてアドバイスすることの3つでしたが 結果的には 私のほうが学ぶことの多い旅でした。中国の国土の広大さ 多様さは地図を広げて分かっているつもりでも じかにこの眼で見るとは初めてのことであり

見るもの・聞くものすべて目新しく得るところ多い10日間でした。

見学したのは 地質関係の博物館では 北京の中国地質博物館 周口店の北京猿人展覧館 桂林の岩溶地質館 広州の広東地質博物館の4つ。その他では 故宮博物院(紫禁城) 定陵博物館(明の十三陵の一つ)を訪れ 有名な万里の長城や桂林の灑江川下りも楽しむことができました。

なかでも北京から桂林まで2,000km 30時間の汽車の旅は今回の中国訪問の最大の見どころでした。朝に黄河を渡り 夕に長江を過ぎる車窓からの展望は 華北のまっ平らな褐色の大地から大別山山地を越えて 赤色土に厚く覆われ緩やかに起伏する丘陵地へと 移り替わり 次第に水田が増え竹ヤブが始まり 何時まで眺めていても見飽きることはありません。ただ 昼間が30時間続かないのが残念と思わせるものでした。また 魏の古都 許昌を通じて孔明と曹操の比較を論じ 黄鶴樓を仰いで李白を思い 汨羅を過ぎて屈原を偲ぶなど いささかの漢文趣味をも堪能させるものがありました。しかしそれはそれとして ここでは地学関係の博物館について紹介することにします。



## 中国地質博物館 (北京)

日本で出版されている北京のガイドブックでも 気のきいたものとす その所在が「見どころマップ」などに紹介されていますから すでに見学された方も多いかもしれません。念のためにいうと その場所は 故宮博物院(紫禁城)から中南海をへだてた西方 西四南大街の繁華街から少し横丁へ入ったところです。北京市西城区羊肉胡同15号というのがそのところ書き。羊肉胡同というと何か回民(回教徒)と関連ありそうですが そのいわれは聞きませんでした。ただ この胡同(ホートン 横丁)をそのまま西へ進みますと 自由市場となって 露店が道の両側に並び 人と車(この場合の車は自転車)がごった返した活気溢れる光景に接することができます。

第1図 中国旅程図

話しをもとへ戻します。西西南大街と羊肉胡同との角には地質博物館の大きな案内板が出ています。これを目印に建物一つ分入った所が目ざす入口です。入口は狭くてちょっと近寄り難い気もしますが、思いきって中へ入ってみますと、玄関前の前庭はかなり広く、その周りには水晶や礫岩などの大型標本がずらりと並んでいます。中でも赤色砂岩の表面に残された漣痕が美事です。階段を上って玄関ロビーに入るとここにも魚卵状の赤鉄鉱や自然銅、岩塩といった大型標本。ただこの照明が暗く、気付かずに通りすぎそうなのが玉に瑕です。しかし、とにかくここまで入っただけですが中国と一驚させられます。

館内の展示は、1階から4階までで、1) 中国の鉱産資源、2) 地球の歴史、3) 地層・古生物、4) 鉱物・岩石、5) 鉱床、6) 宝石・工芸品の6部門に分かれています。床面積は総計約1万㎡といますから、わが標本館のざっと3倍です。展示標本は、さすがに豊富

です。先カンブリア紀から現在までの岩石・地層がすべて発達する広い国土を反映して、多種多様な見ごたえのある化石や鉱物がふんだんに陳列してあります。ワラジのような三葉虫から無造作に転がされた貴州サンゴの単体標本等々すばらしいものばかりです。展示技術を云々する前に、本物の迫力に圧倒されてしまうというのが正直なところ。展示の仕方にも色々工夫がこらしてあり、地下断面を描いた透明アクリル板を何枚も重ねて、鉱床の立体的な賦存状況を示すとか、晶洞や鍾乳洞の実物大の模型を設置するとか、見て楽しく理解しやすい展示を目ざしていることが窺われます。また4階の宝石や玉細工の展示も目を見張らせるような逸品ぞろい。わが標本館の「石の工芸品」のコーナーが恥ずかしくなってしまう。1階では玉細工や印材などの土産品も販売しています。

以上の博物館全体としては、館内の照明が多少暗いこと、動的な展示が少ないこと、見学者がボタンを押した

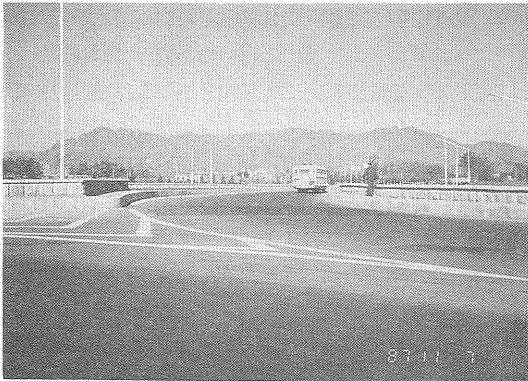


写真1 北京北方、軍都山（燕山に連なる山地）を望む。

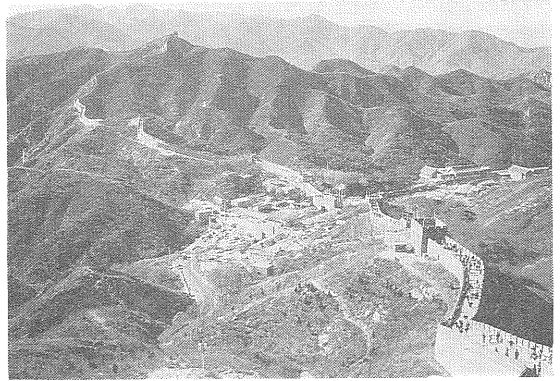


写真2 万里の長城（八達嶺）

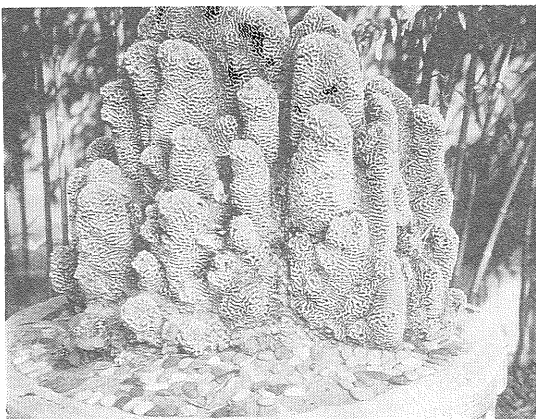


写真3 紫禁城、御花園のサンゴ（北京）



写真4 車窓から黄鹤楼を仰ぐ（武昌）

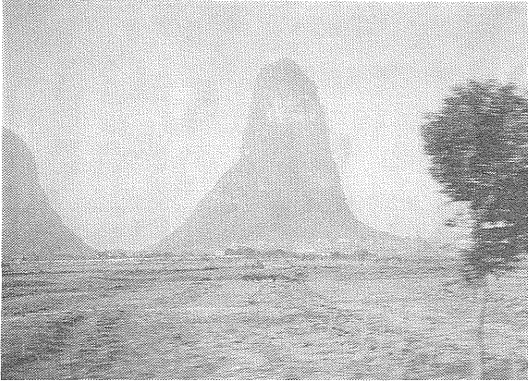


写真5 車窓に次々と現れる石灰岩の奇峯（桂林郊外）

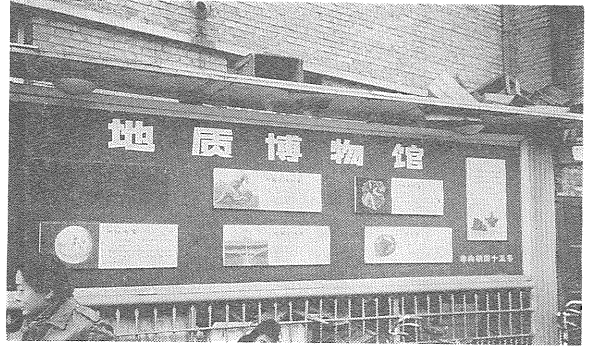


写真6 西四南大街 街角の案内板



写真7 地質博物館の玄関と外事係秘書の呂さん



写真8 屋外に並んだ大型標本（北京 地質博物館）

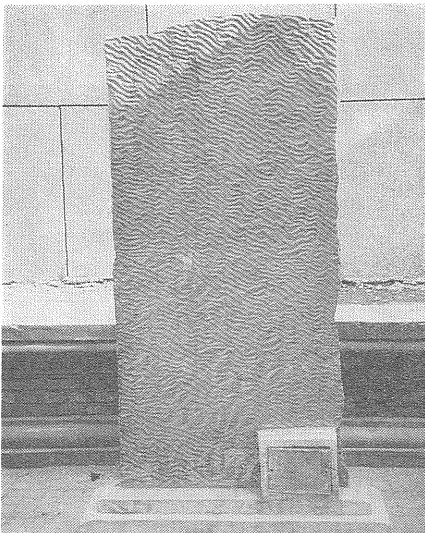


写真9 美事な漣痕化石（北京 地質博物館）

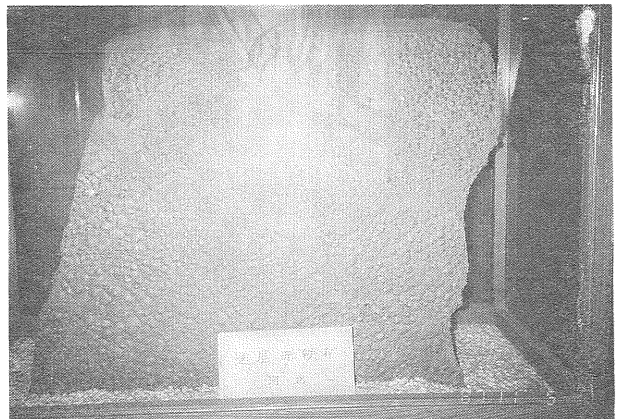


写真10 魚卵状赤鉄鉱の大型標本（北京 地質博物館）

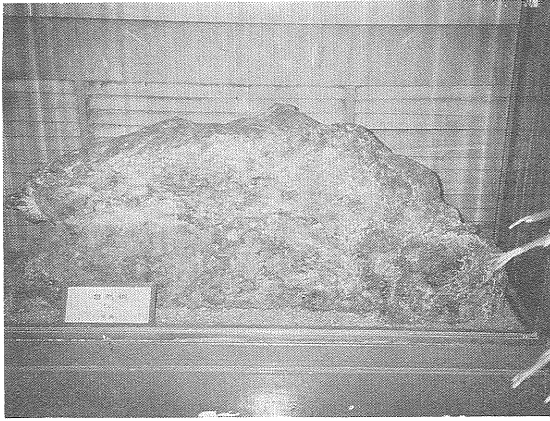


写真11 玄関ロビーの自然銅標本（北京 地質博物館）

り触ったりできるような展示が少ないのが残念と言えるでしょう。しかし 本物の標本の迫力は それらの難点を補って余りあります。なお この博物館の開館時間は 8:30~17:00 ですが 昼休みが 11:30~13:00 と 1 時間半あります。その時は表通りの西西南大街へ出て 近くのレストランへ行くのがよいでしょう。山東料理の同和居飯荘が有名です。中国風にゆっくり時間をかけて昼食をとりましょう。それと月曜日は休館ですから 計画を立てる際には御注意を。

ところで この中国地質博物館副館長の黄正之博士の説明によりますと 1916年に北京地質調査所内に地質博物館として設置されたものが母体となり 1949年の解放後本格的な活動を開始した中国最初にして最大の地質博物館ということです。現在は地質鉄産部に属しており 同部に関連した各地の地質系博物館（建設中のものも含め

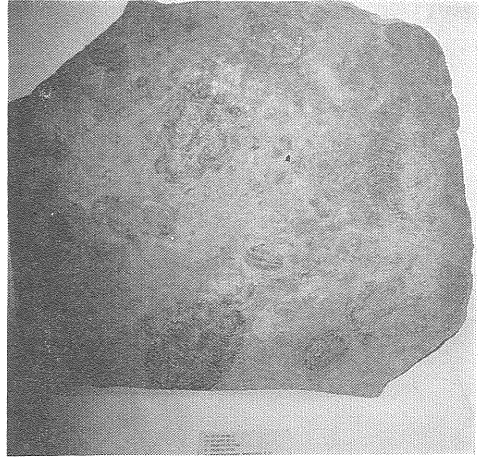


写真12 ワラジ大の三葉虫（北京 地質博物館）

て全部で73ということ)の中心的存在になっています。

ここには 130 人くらいの職員がいて 研究者はその中の約 3 分の 2 ということ。わが標本館とはまさに雲泥の差です。研究面ではすべての分野を包括していますが その中でも古脊椎動物や宝石の研究に重点があるそうです。その他 地質学史の研究 博物館の展示・運営面での研究も行われていると聞きました。来年(1988年)には 岐阜で開かれる中部未来博にここから恐竜(山東省産のカモノハシ竜)の全長15mの大型復元標本を出展されるということで 博物館の人達も楽しみにしておられました。また この博物館からは 藍銅鉄(広東省産)の見事な標本を頂きました。写真では 美しい深味のある青藍色を見て頂けないのが残念ですが今 第4展示室の新着標本の棚に展示中ですから実物を御覧下さい。

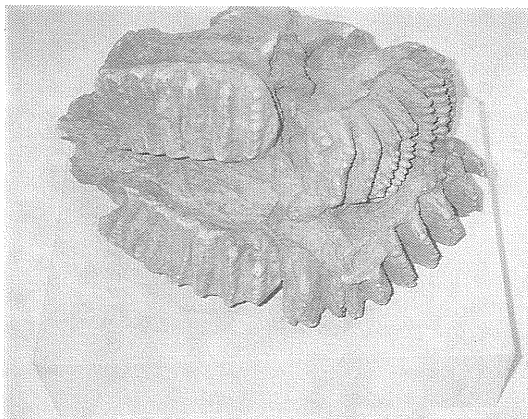


写真13 ステゴドン象の大白歯化石（北京 地質博物館）

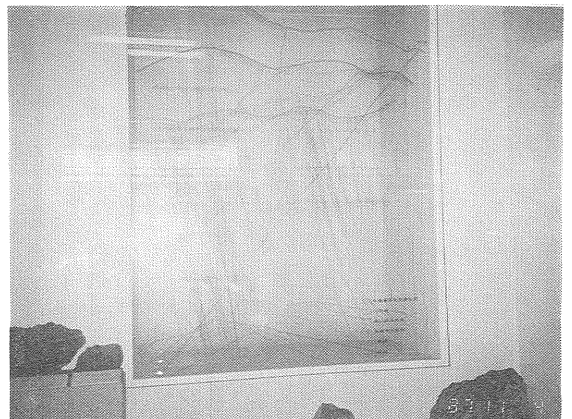


写真14 鉄脈の地下賦存状況を立体的に示した展示（北京 地質博物館）

館内での展示や研究の他 この博物館では館外での普及活動にも力を入れているのが特色のようです。普及活動の一つの面は普及誌の刊行です。地質博物館と地質科学普及協会との共同で「地球」という雑誌が隔月に発行されています。各号32頁の薄いものですが表紙・裏表紙などに地学関係の写真を沢山載せて丁度この「地質ニュース」のような体裁です。紙質のせいか写真が余り鮮明でないのが残念ですが内容は標題を見ただけでもバラエティに富んでいて面白そうです。いずれ中国語に堪能な方に紹介してもらいましょう。普及活動のもう一つの面は青少年向けのもので例えば北京市教育局などとの共同で地学実習の夏休みキャンプが実施されているとのこと。1986年の例でいいますと全国110ヶ所のキャンプに1万人以上の学生が参加したとのことですから驚異的です。

また北京市内の中学生(?)を対象とした地学関連の研究成果の公開展示も毎年この博物館の一室で行われるそうです。4階の半分がこうした特別企画のために用意されています。私が訪れたときはその展示が丁度とり払はれたばかりのところ残念でした。

こうした普及面での努力もあってか入館者は年間10万人位と聞きました。わが標本館の場合の2.5倍から3倍にあたる数です。ここでは旅行社のパッケージにのって大型バスを連ねた団体客が繰り出すということもないでしょうからこの入館数は地質博物館の存在がひいては地質学の意義が国民各層に広く浸透していることを示す数字だと思います。

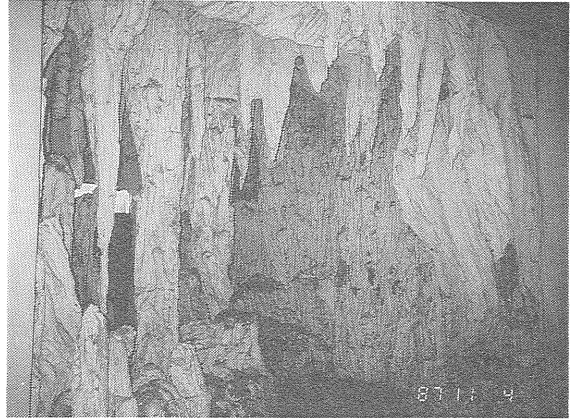


写真15 鍾乳洞の実物大模型(北京 地質博物館)



写真16 玉細工と原石の展示(北京 地質博物館)

### 北京猿人展覧館(周口店)

北京の中心部から南西へ約50km 車で1時間半ばかり

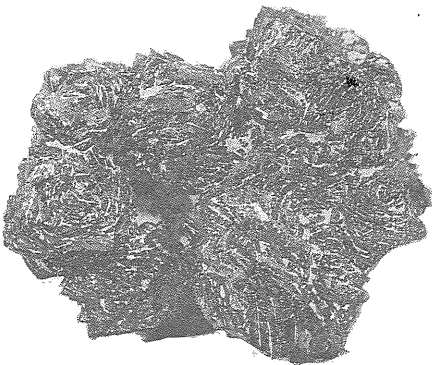


写真17 中国地質博物館から寄贈された藍銅鉱標本

1988年3月号

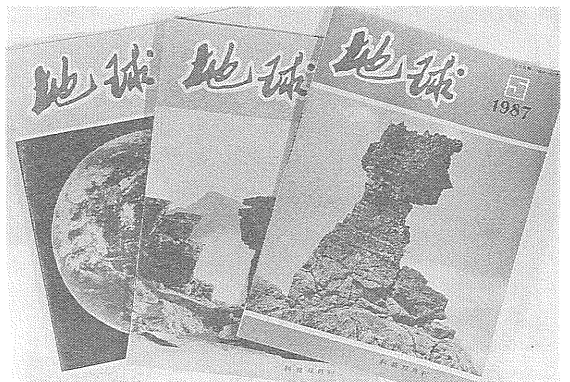


写真18 中国の地学普及誌「地球」

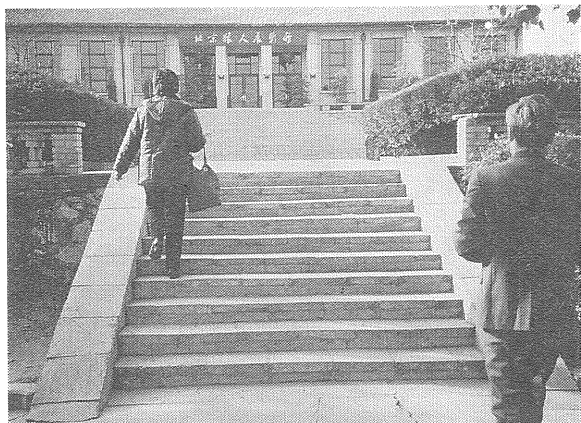


写真19 北京猿人展览馆の前景（周口店）

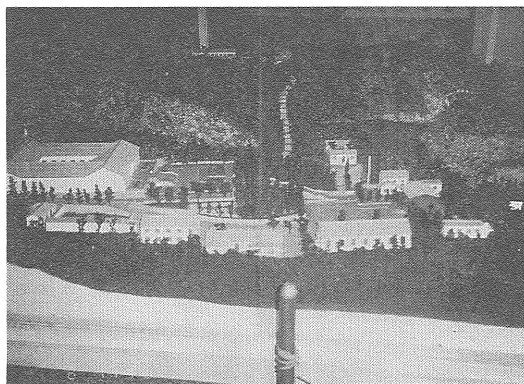


写真20 周口店遺跡付近の地形模型（北京猿人展览馆）

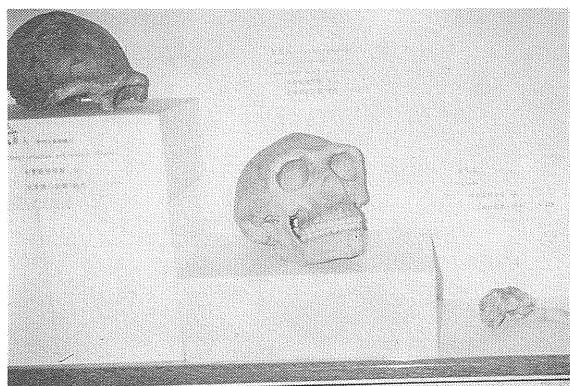


写真21 北京原人頭蓋骨の模型（北京 地質博物館）

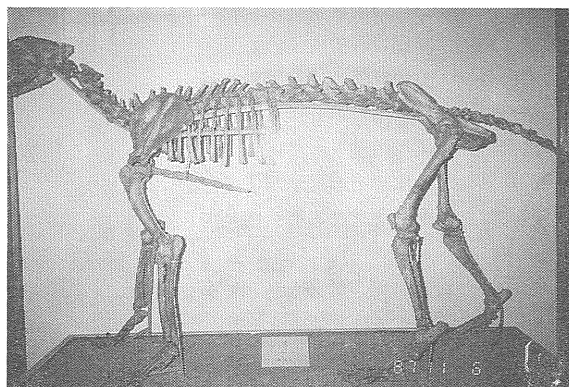


写真22 トラの復元模型（北京猿人展览馆）

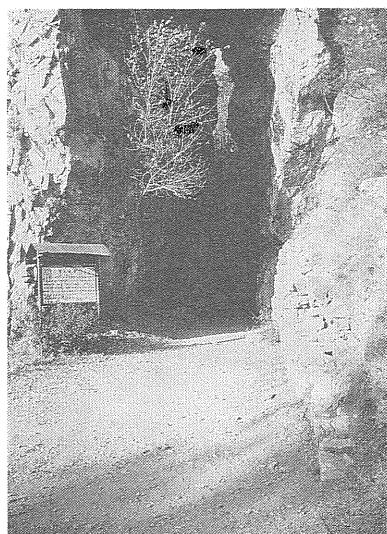


写真23 周口店遺跡の発掘あと（北京猿人展览馆）

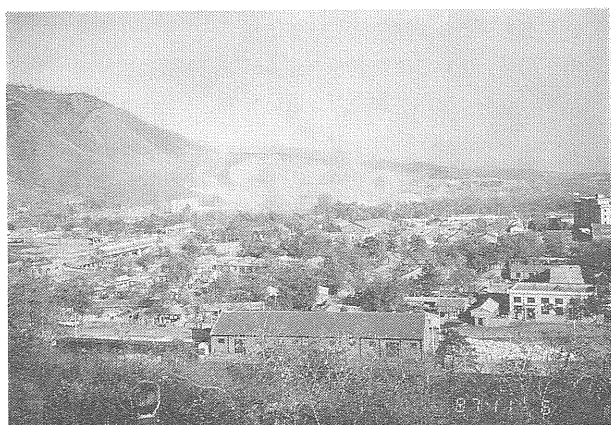


写真24 周口店遺跡から北方の石灰岩採掘場を望む

りの周口店にあります。行政的にはここも北京市ですから北京市というのは広大です。途中永定河を渡ります。今は新道ができて有名な蘆溝橋のすぐ下流を通るのですが日本の中国侵略発端の地と思うと胸が痛みます。

猿人展覧館は太行山脈が華北の平野に接するところにあります。このあたりオールドビス系石灰岩が広く発達しておりその裂隙や洞穴から旧石器時代の人骨・獣骨化石や石器類が大量に発掘されました。発掘は1927年以降営々と続けられ40体分以上の人骨10万点以上の石器を産出しましたが現在は続行されていません。研究所もここにはありません。

展覧館は1979年にでき毎年の見学者は10万人以上(学生・生徒の団体見学が多いとのこと)に達し日本人も年間1,000人位が訪れるとのことでした。館内はほぼ4部屋に分かれておりぐるっと一巡する間に周口店付近の地形模型地史の解説に始まって北京原人(約50万年前)と山頂洞人(約2万年前)の模型や石器のほか彼等と共存していた動物クマやハイエナ・トラなど

の復元標本も多数見られます。そのうち最大のものは高さ3.5m前後8mに達するマンモス(?)です。またこの付近で産した鮮新世の魚化石——一枚のスラブ中に多数の魚化石が群がったもの——も立派です。年代測定古地磁気測定などの成果も展示してあります。

館内の展示はわりとこじんまりしたのですがここでは館外の発掘跡を一巡するのが見どころです。ざっと30分くらい要するでしょう。第一頭蓋骨や山頂洞人の発掘地点(層準)はそれぞれマークをつけて保存されています。裂隙や洞穴を充填した石灰岩塊がいずれも鋭い稜をもった手の切れるような角礫で風化の跡を少しも残していないのが驚きです。

遺跡付近一帯の2km<sup>2</sup>は北京原人当時の生活環境や景観を復元して遺跡公園として整備する予定とのこと



写真25 桂林で開催された地質系博物館の展示技術セミナー

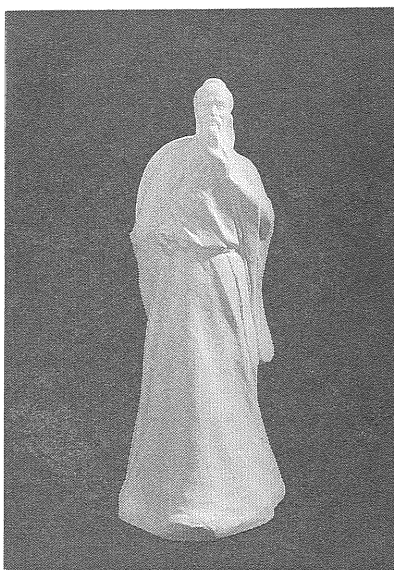


写真26 カルスト研究の先覚者 徐霞客 (1587-1641)

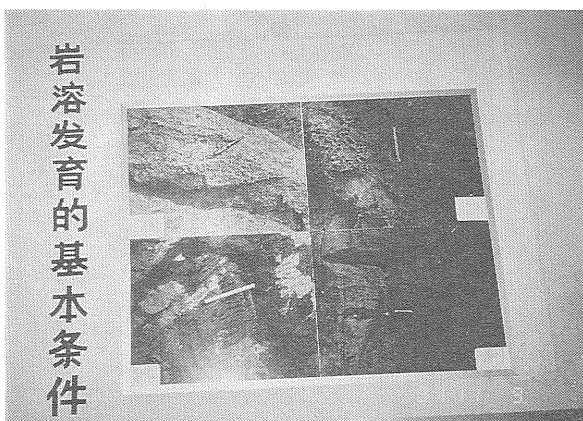


写真27 カルスト発達の解説パネル(桂林 岩溶地質館)

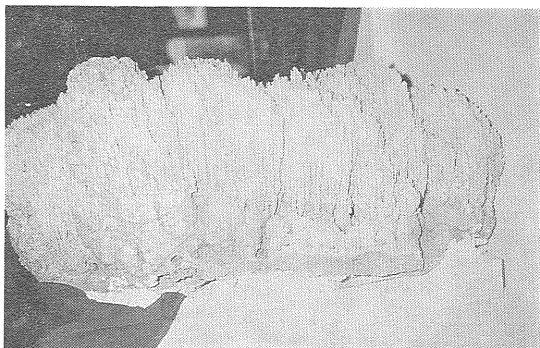


写真28 複雑な外形と繊細な表面構造をもった鍾乳石 (桂林 岩溶地質館)

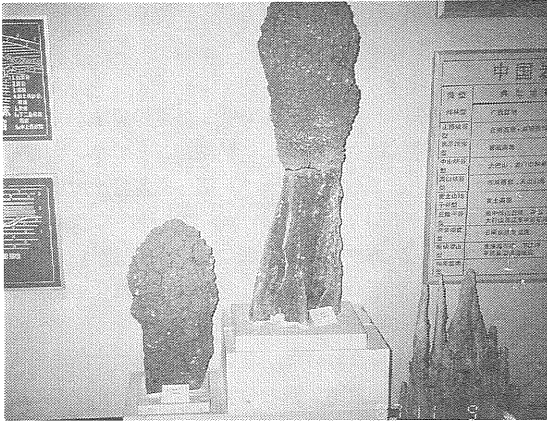


写真29 複雑な表面構造を持った鍾乳石（桂林 岩溶地質館）

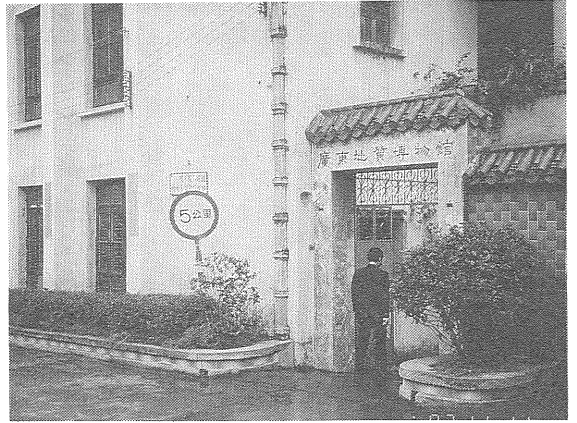


写真30 広東地質博物館の入口



写真31 広東省の鉱産資源（広東地質博物館）

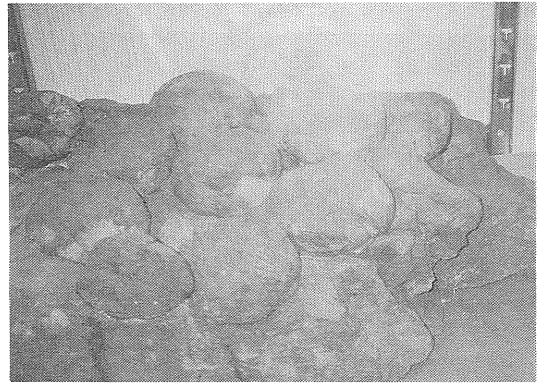


写真32 恐竜の卵（広東地質博物館）

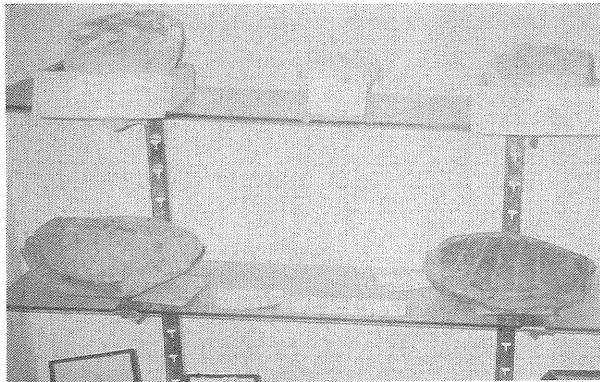


写真33 カメの化石（広東地質博物館）

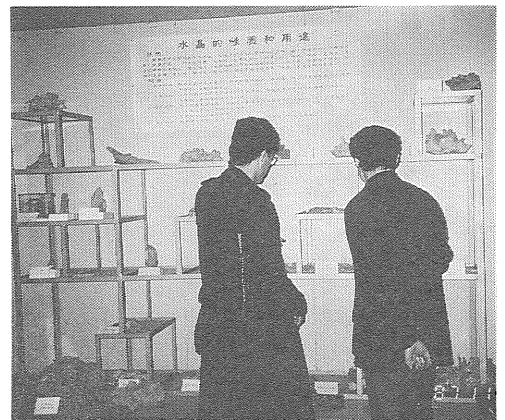


写真34 水晶の展示（広東地質博物館）



で これからが楽しみです。この丘陵から東方へは華北の褐色の大地が目もはるかに広がり 北方の山々はくっきりと鮮明な稜線を連ねています。原人が生活していた50万年前もやはりそうだったのでしょか。

### 中国岩溶地質館（桂林）

これは桂林にあるいわば“カルスト博物館”です。桂林市街から灘江を東へ渡り 七星公園を過ぎた郊外にあります。中国のカルスト研究の一大センターとなっている岩溶研究所のすぐ隣です。ここは中国でもっとも新しい博物館といえるでしょう。なにしろ1987年11月12日にオープンしたばかりですから。実はこの博物館 当初は11月9日に開館の予定で それに合わせて全国の地質博物館関係者が桂林に集まり 展示技術に関するセミナーを行い その席上で私が日本の地質標本館について紹介するはずだったのです。完成が少し遅れたため 私はこの博物館の完成前の最後の見学者ということになり 明代末の大旅行家・大地理学者にして世界最初のカルスト研究者と称せられる徐霞客（1587～1641 今年が生誕400年）の石膏像を頂戴する光栄を担うことになってしまいました。

この博物館は 今回中国で見た博物館のうちで もっとも新しいというだけでなく もっともモダンなものでもありました。2階建の建物の1階フロア中央が池になっていて その上が吹抜けです。1階でグルッと一回り展示を見て 池の上に差ししかかった階段を上り さらに2階を一回りするという順路になっています。

展示としては 中国における石灰岩の分布やカルスト地形の形成についての解説に始まり 鍾乳石や石筍 その他の洞穴生成物が次々と配置してあります。いずれも大型美麗の逸品ぞろい。地質だけでなく洞穴生物についての展示もあります。ただし 繊細な表面構造をもった標本などがむきだしで陳列されているのを見ると塵や埃で汚れてしまうのではと心配です。

桂林を訪れる人は まずこの博物館でカルスト地域の地形・地質について一通りの予備知識を得ておくのが良いのではないのでしょうか。「天下の甲」といわれる桂林の山水を見る目が一段と深くなること請け合いです。

### 広東地質博物館（広州）

広州市の東部 東風東路に面した一角にあります。広東地質局の近くです。入り口は写真のように瀟洒でちょっと料亭の入り口といった感じ。この博物館は広東地質局に属しており 1959年に開設されたと聞きま

した。展示面積876㎡ 専従職員5人とごく小規模なものです。現在のところ 手狭なため 要望があれば見せるといったいわば半公開の状況とかで 見学者は年間4,000～5,000人 その大半は学生・生徒の校外授業の一環だそうです。

展示は 鉱産資源 岩石・古生物 普通地質の3部門に分かれ11室にわたっていますが 広東省に関連した地質 とくに鉱産資源についてのものが多いようでした。展示標本は例によって立派なものばかり。なかでも恐竜の卵やカメの甲羅の化石が見事です。水晶のコレクションも豊富です。鉱物・鉱石の展示室は 私達の溝の口時代を思い出させて懐かしい気がします。標本の登録も 大福帳式のようなものでした。しかし 来年には現在地の隣に3階建の新館を建設し 展示面積もぐっと広がるそうですから 次の機会に期待することにしませう。

以上 中国でいくつかの博物館を見て回ってもっとも感じたことは 「博物館というのは その国の社会の諸々の側面——生活習慣や教育 産業や技術のレベル等々——の直接の反映である」ということです。「照明が暗い」の「子供がもっと参加できるディスプレイを」とあれこれ注文をつけることはできません。しかし 文字どおり「地大物博人多」の中国です。この言葉は 何処へいっても素晴らしい実物標本に恵まれ 専門分野について永年におたって仕事を続けてきた多くの研究者を擁する中国の地質系の博物館についてもピッタリあてはまります。この3者がうまく結合したとき 中国の博物館の一層の発展は刮目して待つべきものがあります。ただ 現在でも 展示内容などを簡単に解説したリーフレットのようなものがそれぞれの博物館にあったら と思います。後で記憶を新にして こういうレポートを書くのに大いに役立つといってしまうのは手前勝手かもしれませんが。

中国ではこのところ 地質系の博物館の充実 地学知識の普及に随分と力を入れていると聞きます。それによって 青少年の自然に対する理解を深め 自然を愛する心を持たせようということだそうです。これは“精神文明”（この言葉は日本語にうまく訳せないのですが）の運動の一環であり 自然科学の他の分野にも大きな影響を及ぼしているのだそうです。また 博物館の建物を新築したり 展示を斬新にしたりする面だけでなく 標本・試料の管理・登録といった面でも 電算機の導入などによって 本格的な取組みが始まっています。

この次 いつかまた 中国を訪れて もう一度各地の博物館を見学する機会を得たいものです。